

別冊 おおいだものがたり ～資料館資料編～

「加藤洵綾生誕120年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」展より

ただ今資料館では「加藤洵綾生誕120年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」展を開催中ということで、この中から、齋藤茂吉が描いた絵画を取り上げます。

齋藤茂吉といえば、言わずと知れた短歌界の巨匠であり、山形を代表する偉人です。町民歌でも馴染み深い人物であり、歌人としての功績を敢えて取り上げる必要はないかと思えます。よって今回は画人としての齋藤茂吉を考えてみます。

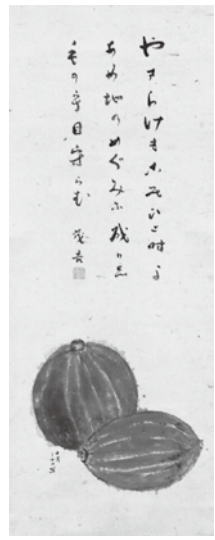
齋藤茂吉が大石田時代に数十点の絵を描いていたことはあまり知られていません。茂吉が本格的な絵を描きはじめる契機は弟子の加藤洵綾によるものでした。加藤洵綾は安田鞆彦門下で、信州の山々を好んで描いた日本画家です。画業のかたわらアラragi会員として短歌を投稿しており、はじめ長野の歌人島木赤彦に、赤彦死後は茂吉に師事し、度々直接の指導を受けていました。この洵綾が戦後間もなく金瓶に疎開中の茂吉を訪ね、このような時こそ画を描くべきだと強く勧めるとともに、板垣家子夫宅に疎開させていた自らの画材道具一式を贈りました。

そんな経緯で絵を描きはじめた茂吉ですが、実は彼の周りには洵綾以外にも画家たちの存在がありました。その一人が洋画家金山平三です。金山平三は以前この小欄でも取り上げましたが、東京美術学校で黒田清輝に学び、帝室技芸員も務めたほどの画家です。当時は横山に疎開しており、年齢が近かったこともあって大石田時代の茂吉とは頻りに交流しています。また、日本画家の平福百穂も茂吉と深いつながりのあった人物です。平福百穂は円山派を基として、日本画に写実表現を取り入れた画風を確立し、このことは近代日本画における一つの到達点ともいえます。この写実の追求の過程で、写生を旨とするアラragiに入会し歌人としても活動しました。さらに自身の作品の頒布会を開くことで、財政難に陥っていたアラragiの窮地を救った恩人でもあることから、茂吉も深く敬愛しており、昭和22年の秋田旅行の一つの目的には百穂の墓参がありました。

このように加藤洵綾、金山平三、平福百穂といった当代随一の画家たちがごく身近にいた茂吉ですが、彼の作風はどの先達の影響下にもないように見えます。洵綾のパステル画のような鮮やかで柔和なタッチとも、百穂の作品が発する南画のゆるゆるとした雰囲気とも、金山の細やかな色彩構成とも全く異なった、茂吉独自の、そして一貫した表現を見ることができます。

茂吉の絵画は、対象を捉える眼差しがそのまま作風となってあらわれます。それは描く対象を余すことなく観察し、表現しようとするその姿勢であり、このことは茂吉の作歌姿勢とも重なります。つまり本質を探り出そうとする洞察力は、絵を描き始めてから身に付けた一朝一夕のものではなく、作歌を続ける上で長年培われ、磨き上げられた技ということです。作画技術でいえば本職の画人には及ばないものの、そのひたむきな姿勢で写し取られた静物画には巧拙を超えた迫真性があり、見る者を強く惹き付ける熱量のようなものが込められているのです。

「加藤洵綾生誕120年 大石田の齋藤茂吉とその周辺」展は11月7日(日)まで



大石町公式アカウント開設
LINEはじめました

防災情報などを
受け取ることができます。
**友だち登録を
お願いします!**

登録方法
右のQRコードを読み
取って友だちに追加
してください。

大石町公式LINE

**防災放送の内容を
電話で確認できます**

防災放送が聞き取りにくい、放送内容を確認したい等のご意見をいただき、町では防災放送確認ダイヤルサービスを開始しました。

このダイヤルは定時(夕方6時のメロディ等)放送を含め、直近の放送から8時間以内の内容を順次聞くことができます。

確認ダイヤル：0237-48-8444

■総務課総務グループ TEL35-2111 (内線218)

町の人口 令和3年9月1日現在

世帯数	2,299 戸	(-5)
総人口	6,586 人	(-15)
男	3,247 人	(-10)
女	3,339 人	(-5)
(8月中の異動)		
出生	0 人	転入 8 人
死亡	8 人	転出 15 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。